

## 自然農法歳時記 No.39 北海道北見 無肥料 自然農法 秋場和弥 18.5.20.

4月は史上最低という寒い日々が続きました。仲々雪解け水が凍結土を溶かしきれず、土の乾きも半月程遅れ、5月1日、2日は雷雨をともなった夕立がダメ押ししました。

しかし、一転5月5日の子供の日を境にこの半月20～28北見にとっては真夏に近い、暖かい日々が続き、どんどん土は乾き、例年部分的に乾ききらずに、目をつぶって無理して播種をする場所もサラサラと最良の土壌状態となり、一気に納得いく播種できました。

いつも申し上げていますように、一切を自然界にゆだね、自然力を最大限引き出させて頂き最良の根張りを許されていく為に、日々感謝と祈りの心言行を心がけていく無肥料自然農法実践者にとって、春のスタートラインの第一歩の成否は、大変重要になってまいります。

特に北限の畑作地帯にあって一年一作土の乾きとともにヨーイドンで一日1町～2町歩(3,000坪～6,000坪)播種していく時、播種直後に大雨にたたかれると、その日の播種分は土がコンクリート状となり、発芽に大変苦労し、その後の根張り、成長に多大な悪影響を及ぼします。少なからず農業、農学に関わった方なら御理解頂けると思いますが、単位面積あたり世界最大級の土地生産性を誇る日本の慣行、JAS有機栽培ではどれほどの化学・有機肥料・各種堆肥が投入されているか、そのむこうを張って完璧に無投入維持し続ける為にはそれしか方法のない、自然界との真剣な係わりに全精力を傾げざるをえません。

むしろあらゆる面で、正しく自然界と向き合う姿勢に誇りを持って、明るく、夫婦力を合わせて、日々すごさせて頂いている現状です。先々代祖父母は屯田兵が入植した後の次世代入殖の為、石あり、わき清水ありの荒地の為、先代父母とともに相当苦労してようやく水田に仕上げたようでした。

昭和46年全面積水田休耕して、自然農法畑への転換、父の口癖は「悪条件だからこそ、背水の陣となり、天意に帰依しようという心が芽生える、だから自然農法の先駆者は土壌条件良くない人が残っているのでは」と、私の代に変わって山林開墾して、表土のうすい火山灰土、負債整理のための無理なローテーションにより無肥料での農地の地力回復あきらめかかっていた時、15年にわたる有機栽培による肥料残渣が2年間放任する事によって益草原野化して、しっかり土作りになった地力のある土地を伊藤さんから昨年まで5年間お借りでき、除草は大変苦労しましたが、豊穡の実りで報われる事ができました。

この間に私のやせかけた土地は様々な緑肥試験が可能となり長年胸にあたためていた想いを予想仮説通り実現できました。全面積自然農法の原点である35年の石ころ、わき水の土地は、自家採種35年の黒大豆ならしっかりと根粒菌が様々な自然界の要素をとりこんで、連作し続けるところまで仕上がってまいりました。

又表土うすく、草すらなかなか成長しにくくなった6町歩の火山灰土はクローバーの地下茎を越冬して2年越しで生かすことにより、見違えるほど成長する事の発見で、土作り済み今年度伊藤さんに全ての土地をお返しするにあたり、3年ぶりに雪手亡、大豆を栽培させて戴きますが、どんな成長をするか楽しみにしています。

このクローバーの強じんな生態を応用し、おととしから、春まき小麦から秋まき小麦に転換し、前年9月に小麦とクローバーを共生して、播種しましたが、2年続けて越冬に成功しました。世間のような3種類の強力な「冬枯れ防止剤」(農薬)を使わずして、無肥料無農薬で越冬できた奇蹟に感謝しております。本当にここまで、たどりつく事ができたのも、御縁を頂き支援して下さった皆様のお蔭でございます。

心からの感謝をこめて自然農法歳時記No.39号(サンキュー号)として御案内させていただきます。